

小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

⑥ 「COP28」豆知識 く 教皇フランシスコの願いに心を合わせてく

今年の10月4日、アシジの聖フランシスコの祝日に教皇フランシスコは回勅『フウダート・シ』に続く使徒的勅告『フウダー・テ・デウム』(仮訳・神をたたえよ)を発表されました。既に先月カトリック新聞でも紹介されたように、「全ての善意の人々に、気候危機について」と宛てられたこの文書は、回勅をさらに詳しく説明し、補う「続編」に当たると教皇は記しています。

無関心ではいけない
COPと国際社会の動向
これまで教皇は、締約国会議(COP)開催のたびにCOP参加の各国首脳や関係者だけでなく、私たちも含めた国際社会全体にメッセージを発信してきました。新たな使徒的勅告の中でも、2023年11月30日から12月12日まで、ドバイで開催される「COP28」について言及しています。私たちは、信仰者であるだけでなく一人一人が地球市民でもあり

ますから、信仰の次元として気候変動問題への関心を向けるべき、国際社会の動向に無関心ではられません。そこで今回は、COPやその背景などについての豆知識を共有できればと思います。少し専門的な語に面食らうかも知れませんが、間もなく日本語で読める使徒的勅告を通じて教皇のメッセージがより理解しやすくなれば幸いです。

科学的根拠 IPCC報告書と気候変動の危機的状況
毎年、何十億トンものCO₂(二酸化炭素)が、石炭や石油、ガスの生産によって大気中に放出され、人間の活動が記録的な水準の温室効果ガス排出をもたらししています。その勢いはまったく衰える兆しを見せず、国連は、気候変動の問題をその危機的状況から「気候危機」と呼んでいます。

「国連気候変動枠組み条約」
とCOP
「国連気候変動枠組み条約」とは、1992年開催の「地球サミット(国連環境開発会議)で採択された条約で、日本も含めて世界中が参加して94年に発効しました。大気中の温室効果ガス濃度の安定化を最終的な目標とし、気候変動がもたらす悪影響を防止するための国際的な枠組みを定めています。

「COP」は「Conference of the Parties(略称)直訳
カンファレンス
パーティーズ」
「COP」は「カンファレンスパーティーズ」直訳
「COP」は「カンファレンスパーティーズ」直訳

すれば条約の最高意思決定機関である「締約国会議」という意味ですが、具体的に「国連気候変動枠組み条約締約国会議」



(カット=安藤みちこ)

「1.5度目標」を目指す
国際社会と日本
さて、2015年にパリで開催された「COP21」では「パリ協定」が採択され、新たな転換点といわれました。世界の平均気温上昇を産業革命以前に比べて2度よりも十分低く保ち、1.5度に抑える努力を追求する」という世界共通の長期目標が掲げられ、「1.5度目標」「2度目標」と呼ばれています。この協定を受け、先進国を中心に多くの政府が「カーボンニュートラル(温室効果ガスの排出量と吸収量の差し引きを0にする)」の実現を表明。

その後、2021年に出された

「IPCC評価報告書」では、既に世界の平均気温は産業革命以前に比べて1.09度上昇していることが示され、目標達成にはより一層の大幅な排出削減努力が必要であることが分かりました。そこで、同年に英国グラスゴーで開催された「COP26」では「グラスゴー気候合意」が採択され、「気温上昇を1.5度に制限するための努力を継続することを決意することになりました。日本政府は、2050年までにカーボンニュートラルと、2030年度において温室効果ガスを2013年度から46%削減を目指し、さらに50%の削減に挑戦するとの目標を国連に提出しています。

「COP28」の裏を折り返し、
小さなエコを
このように、国際社会の気候変動問題とその取り組みは、気候変動枠組み条約とCOPで採択された具体的な枠組みの下での各国政

府の自主的な対策によって進められています。
かねがね教皇は、国際社会のこれらのプロセスがまだまだ不十分であると指摘しつつ、海面上昇によって生活を脅かされたり、水・食糧の安定的な確保に影響を受けたりする人々の大部分が貧しい人々であることを主張し続けています。新しい使徒的勅告でも「COP28」に向けて、気候危機への無関心や無策への厳しい非難を展開し、状況が悪化しつつあることに警鐘を鳴らしています。「会議の参加者たちが、特定の国や企業の短期的利害よりも、共通善と子供たちの将来とを考慮できる」「ラウダー・デウム」60)ように共に祈りましょう。

そして、個人の努力だけではこの危機に立ち向かうことはできず、国家レベル、国際レベルの大きな政治的決断が必要だと述べても、教皇が文書の最後の部分で「一人ひとりが変化することなくして文化が変わっていくことはい、と気づく必要性」(同70)、「汚染および廃棄物の削減そして賢慮ある消費という家族ごとの努力が新たな文化を創出(同71)しつつある」と述べていることを心に留めて、次回からは再び小さなエコを考えていきたいと思えます。
※「ラウダー・デウム」の訳は、瀬本正之神父(イェズス会)による仮訳